

メッセージアウトライン

創世記 1:3~5 「光があれ」

[3-5]「神は仰せられた。『光があれ。』すると光があった。神は光を見て良しとされた。神は光とやみとを区別された。神は光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた。夕があり、朝があった。第一日」

「初めに、神は天と地を創造された」(1)これは神の創造の事実についての宣言であり、具体的な説明は2節以下に続いており、「地は茫漠として何もなかった」(2)とは初めに神は天と地(空間と物質)を創造されたが造られた物質(地球として形を整えるための構成要素である諸元素)は最初はただの元素でまだ整った形がなく何もなかった(住む者もいなかった。空虚であった)との意味であった。「大水(テホーム)」(2)も同様に水の分子として存在していたが、まだ形がなく、活動もしていなかった。しかし神の霊(聖霊)が水の上を動いており、聖霊の動き(活動)により物質にエネルギーが与えられ、それまでの形のない地が水を含む球形に形づくられていったと考えられる。

そして神は「光があれ」と仰せられた。すると光があった。神はそのみことばをもって無から有を呼び出されるお方である。1章全体を通して、神はそのみことばによってすべてのものを創造されていることがわかる。光が現れたところにはやみがなくなる。神はこの光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた。神は夜と呼ばれるやみから区別するために光を昼と呼ばれたのである。

「夕があり、朝があった。第一日」…神は天と地を創造され、光を創造されて、昼と夜を区別された。そして夕から朝にかけては神は何もなされなかった。これが第一日であった。このように第一日が始まると昼と夜、すなわち光の期間とやみの期間がめぐって来るようになった。

この「夕があり、朝があった…」という形式は神の創造の六日間の各々の終わりに同様に用いられている。したがって、これらの日の各々の期間は第一日も含めて明らかに同じであったことがわかる。太陽はまだ造られていなかった(1:16)とはいえ、このように昼と夜の巡りくる取り合わせは、地球がすでに自転しており、地球のひとつの側に太陽に相当する光の源が置かれていたことを意味する。そしてこれらの日の長さは通常の日(24時間)の長さであったことも明らかである。1章で第一日、第二日、第三日…と繰り返される「日(ヨーム)」ということばを進化論に立つ何億年もの地質時代として解釈する考えがあるが、それは無理である。その理由は①1章に書かれている創造の順序は地質時代を表わすとされる岩石中に見られる化石の順序とは非常に違う。②すでに間隙説において指摘されたように化石は苦しみと死が世界を支配していたことを示しているのであって、「日」は地質時代であるとの説を受け入れることは、すなわち罪が世界に入る前に死が存在していたことを受け入れることになり、人が罪を犯したため、神のさばきとしてこの世に死が入って来たという聖書の教えに真っ向から相反する。→ローマ 5:12 ③聖書の中には日(ヨーム)ということばが「時代」を意味している個所は全くない。それは通常の日(24時間)か、あるいは夜に対する昼の意味で一日(24時間)のうちで日の照っている時を指すことば

であり、また文脈上明らかな時を指すことを意図しない場合以外には、あいまいな意味で用いられることはない。創世記1章に出てくる一つ一つの「日」には各々に明らかな境界があり、一連の六日の中の一日(24時間)なのである。→出エジプト 20:11

やみとの対比でわかるように光は明らかに目で見てわかる可視光線であった。それはすなわち全電磁スペクトルが同時にあったことを意味する。可視光線より波長の長い(目に見えない)赤外線、電波。可視光線より波長の短い(目に見えない)紫外線、X線、ガンマ線の存在である。

このように光を含む全電磁波が実際に働き始めて、順次、物理的宇宙が活性化していったと考えられる。宇宙で相互に働くあらゆる種類の力とエネルギーは電磁気力と重力と核力(原子核を構成する核子[陽子と中性子]相互間に働く強い力)だけであり、これらが今や活性化されたのである。これは神の驚くべく創造の行為であり、こうして創造の第一日は完成され、やがて自然界を支配する人間のために、さらに形態を整え必要とするものを供給する準備が整ったのである。

神は第一日において物理的光を創造されたが、新約聖書はここを引用して人の心を照らす別の光のことも教えている。→Ⅱコリント 4:6 『光が、やみの中から輝き出よ』と言われた神は、私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせてくださったのです」

このことばは信じる者の心を照らす光が、第一日に創造された光と同じ源(神)によることを示しており、神を知り、キリストを知るための光は、この世の学問による知識の光とは全く異質のものであることを明らかにしている。

→イザヤ 9:1~2 「…やみの中を歩んでいた民は、大きな光を見た。死の陰に住んでいた者たちの上に光が照った」→マタイ 4:12~17 (イザヤ書の預言の成就)

すべての人を照らすまことの光としてのイエス→ヨハネ 1:9

世の光としてのイエス→ヨハネ 8:12 「イエスはまた彼らに語って言われた。『わたしは世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。』」

唯一の救いの道としてのイエス→ヨハネ 14:6 「イエスは彼に言われた。『わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません』」

光に照らされイエス・キリストを救い主と信じた者の使命→Ⅰペテロ 2:9 「しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです」